

渡来人の考古学

平成20年度秋季企画展「渡来人の考古学」展示品目録

	資料名	指定員数	遺跡名	所蔵機関
1	弥生土器（甕）	1	和久遺跡	姫路市埋蔵文化財センター
2	弥生土器（甕）	1	和久遺跡	姫路市埋蔵文化財センター
3	弥生土器（高杯）	1	和久遺跡	姫路市埋蔵文化財センター
4	弥生土器（鉢）	1	和久遺跡	姫路市埋蔵文化財センター
5	初期須恵器（杯蓋）	国 1	宮山古墳 墳丘	姫路市埋蔵文化財センター
6	初期須恵器（杯身）	国 1	宮山古墳 墳丘	姫路市埋蔵文化財センター
7	初期須恵器（高杯）	国 1	宮山古墳 墳丘	姫路市埋蔵文化財センター
8	初期須恵器（高杯）	国 1	宮山古墳 墳丘	姫路市埋蔵文化財センター
9	初期須恵器（樽形甕）	国 1	宮山古墳 墳丘	姫路市埋蔵文化財センター
10	初期須恵器（器台）	1	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
11	初期須恵器（器台）	1	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
12	初期須恵器（把手付鉢）	1	国分寺台地遺跡	姫路市埋蔵文化財センター
13	初期須恵器（把手付碗）	1	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
14	初期須恵器（把手付碗）	2	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
15	軟質土器（平底鉢）	1	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
16	軟質土器（平底鉢）	1	姫路駅周辺第3地点遺跡	姫路市埋蔵文化財センター
17	軟質土器（不明）	1	小山遺跡	姫路市埋蔵文化財センター
18	軟質土器（鍋？）	1	姫路駅周辺第3地点遺跡	姫路市埋蔵文化財センター
19	軟質土器（多孔式甕）	1	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
20	軟質土器（多孔式甕）	2	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
21	軟質土器（多孔式甕）	4	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
22	軟質土器（多孔式甕）	1	姫路駅周辺第3地点遺跡	姫路市埋蔵文化財センター
23	軟質土器（把手）	1	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
24	算盤玉形紡錘車	1	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市埋蔵文化財センター
25	算盤玉形紡錘車	1	三方古墳	姫路市埋蔵文化財センター
26	滑石製紡錘車	1	三方古墳	姫路市埋蔵文化財センター
27	1 土師器（高杯）	1	姫路駅周辺第3地点遺跡	兵庫県立考古博物館
	2 土師器（甕）	1		
	3 軟質土器（平底鉢）	1		
	4 軟質土器（鍋）	3		
	5 軟質土器（多孔式甕）	2		
28	鉄鋌	国 2	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
29	鉄鋌	県 1	法花堂 2号墳	姫路市埋蔵文化財センター
30	鉄鋌	国 1	宮山古墳 第2主体	姫路市埋蔵文化財センター
31	曲刃鎌	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
32	U字形刃先	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
33	鋳造鉄弁	1	小丸山古墳	姫路市埋蔵文化財センター
34	三角板鋌留短甲	県 1	法花堂 2号墳	姫路市埋蔵文化財センター
35	小札鋌留衝角付冑	県 1	法花堂 2号墳	姫路市埋蔵文化財センター
36	横刳板鋌留衝角付冑	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
37	頸甲	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
38	三角板鋌留短甲	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
39	肩甲	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
40	銅	市 1	山崎山 1号墳	姫路市埋蔵文化財センター
41	垂飾付耳飾	国 1対	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
42	指輪	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
43	金環	2対	見野長塚古墳	姫路市埋蔵文化財センター
44	玉杖形金銅製品	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
45	雁木玉鉤玉類	市 1式	山崎山 1号墳	姫路市埋蔵文化財センター
46	トンボ玉鉤玉類	市 1式	山崎山 2号墳	姫路市埋蔵文化財センター
47	鉄剣	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター

	資料名	指定員数	遺跡名	所蔵機関
48	彫龍文鏡	国 1	宮山古墳 第2主体	姫路市埋蔵文化財センター
49	画文帯神獸鏡	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
50	鍔轡	国 1	宮山古墳 第3主体	姫路市埋蔵文化財センター
51	1 金環	国 1対	宮山古墳 第2主体	姫路市埋蔵文化財センター
	2 垂飾付耳飾	国 1対		
	3 玉類	国 1式		
	4 琥珀玉	国 1		
	5 首飾り	国 1式		
	6 十字形環頭大刀	国 1		
	7 銀鍔貼金環頭大刀	国 1		
	8 帯金具	国 1		
	9 鉄銚	国 1		
	10 石突	国 1		
	11 挂甲小札	国 1式		
	12 籠手	国 1式		
	13 脇当	国 2		
	14 胡蝶金具	国 1式		
	15 鍔轡・引手	国 1式		
	16 鏃	国 4		
	17 初期須恵器（有蓋高杯）	国 1		
	18 初期須恵器（蓋）	国 1		
	19 土師器（甕）	国 1		
52	1 須恵器（蓋杯）	2	丁3次2号墳	太子町教育委員会
	2 須恵器（短頸甕）	2		
	3 須恵器（蓋）	1		
	4 須恵器（瓶形土器）	1		
	5 須恵器（甕）	1		
	6 須恵器（甕）	1		
	7 須恵器（甕）	1		
53	1 須恵器（蓋杯）	2	丁山頂古墳	太子町教育委員会
	2 須恵器（平瓶）	1		
	3 須恵器（長頸甕）	1		
	4 須恵器（蓋）	1		
	5 須恵器（蓋）	1		
	6 須恵器（台付長頸甕）			
54	皮袋形瓶	1	片山西古墳	姫路市埋蔵文化財センター
55	裝飾付甕	1	手柄山北丘古墳	姫路市埋蔵文化財センター
56	裝飾付須恵器小像（鹿）	2	見野長塚古墳	姫路市埋蔵文化財センター
57	裝飾付須恵器子器（子甕）	3	小丸山 2号墳	姫路市埋蔵文化財センター
58	軒平瓦	1	辻井廃寺	姫路市埋蔵文化財センター
59	軒丸瓦	1	辻井廃寺	姫路市埋蔵文化財センター
60	軒平瓦	1	下太田廃寺	姫路市埋蔵文化財センター
61	軒丸瓦	1	下太田廃寺	姫路市埋蔵文化財センター
62	鷗尾	2	下太田廃寺	姫路市埋蔵文化財センター
63	1 土師器（高杯）	4	未命名（花田町加納原田）	姫路市埋蔵文化財センター
	2 初期須恵器（高杯）	1		
	3 軟質土器（多孔式甕）	3		
	4 軟質土器（平底鉢）	1		
	5 土師器（甕）	1		
	6 軟質土器（長胴甕）	1		



姫路市埋蔵文化財センター

姫路市埋蔵文化財センター
Himeji City Archaeological Research Center

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079)252-3950 / FAX (079)252-3952
URL <http://www.city.himeji.lg.jp/maibun-center/>
E-mail maibun-center@city.himeji.hyogo.jp

目次

I. 渡来文化の波 3

II. 地域社会への参入 21

III. その後の渡来文化 27

市内の渡来系文物出土遺跡位置図 35

展示品目録 39

凡例

1. 本書は、姫路市埋蔵文化財センターで平成 20（2008）年 10 月 5 日（日）から平成 21（2009）年 1 月 12 日（祝）まで開催する秋季企画展「渡来人の考古学」の展示解説として作成したものである。
2. 本書の巻末にすべての出品目録を付し、出土遺跡名や所蔵者を明記した。出品目録番号は、会場での陳列番号と一致する。出品目録のうち、国は重要文化財、県は県指定重要文化財、市は市指定重要有形文化財を指す。
3. 本書写真の番号は、出品目録の番号と一致する。展示の順番とは必ずしも一致していない。
4. 本書掲載の写真は当センター福井 優が撮影し、それ以外のものは所蔵機関、または、撮影者を明記している。
5. 本書及び、ポスター・チラシに掲載の地図は、国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図（網干・姫路南部・加古川・龍野・姫路北部・笠原・安志・前之庄・北条・山崎・寺前・粟賀町）と同院発行の 300 万分の 1 地形図（日本とその周辺）を使用したものである。
6. 本企画は当センター職員が行い、奥田智子、北野弘子、香山玲子、田中章子、寺本祐子、野村知子、三輪悠代の協力を得た。
7. 本書の編集は福井が行った。
8. 今回の企画展を開催するにあたり、次の機関・方々からご協力をいただきました。記して感謝の意を表します（敬称略・五十音順）。

上田 哲也	海野 浩幸	大平 茂	岡山県立博物館
加藤 史郎	佐藤 寛介	菅谷 良雄	太子町教育委員会
津山市教育委員会	東洋大学付属姫路高等学校	姫路市市史編集室	平岡 正宏
兵庫県立考古博物館	藤田 淳	松本 正信	三村 修次
吉井 秀夫	吉倉 雅文		

ごあいさつ

古くから交通の要衝として発展してきた姫路の地には、さまざまな地域との交流の跡が刻まれています。

倭の五王が活躍した 5 世紀頃には、大陸・朝鮮半島から最新の知識や技術を携えた人々が渡来しました。『播磨国風土記』にも記された彼らの足跡は、近年の発掘調査により、より具体的に判明しつつあります。

今回の展示では、市内で出土した渡来系の文物を一堂に会しました。国際交流の盛んな今日、かつてこの地に移り住んだ人々に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

最後になりましたが、発掘調査および本企画展の開催にご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

2008 年 10 月 5 日

姫路市埋蔵文化財センター 館長

渡来文化の波

- 伝えられたモノと技術 -

新たな焼き物



姫路市内出土の初期須恵器

須恵器誕生



初期須恵器 宮山古墳第3主体

古墳時代中期（5世紀前半）に朝鮮半島からの渡来工人によってもたらされた須恵器は、堅牢・緻密で、土師器とは明らかに異なるものであった。

当初、九州や瀬戸内海、大阪湾沿岸では、点在して窯が操業されていた。その後、陶邑窯群（大阪府堺市他）から定型的な器形が大量に供給されるようになると、地方での生産はいったん終焉を迎える。



伝統的な野焼きの土器 弥生土器（1～4）



初期須恵器 蓋杯（5・6）



初期須恵器 高杯（7・8）



初期須恵器 樽形甕（9）



初期須恵器 把手付椀（左 13）
把手付鉢（右 12）



初期須恵器 器台（10・11）

コンパス文に類似する文様がみられるが、コンパス状の施文具ではなく、ヘラ状工具を用いている。本来のコンパス文が退化したものか、施文の方法を知らない工人が製作したものなのだろうか。



初期須恵器 把手付椀（14）

渡来文化の波

- 伝えられたモノと技術 -

新たな生活様式



姫路市内出土の軟質土器

渡来人の生活道具



軟質土器 多孔式甑

渡来人の什器である軟質土器は、多孔式甑、鍋、平底鉢、長胴甕を基本的な器種構成としている。

最近の調査により、それらのいくつかの器種が伴出する出土例が増加し、渡来人の居住を示唆するものとして捉えられている。

しかし、これらの土器は、例えば特徴的な叩き技法が消失するように短期間で消滅し、土師器化するのである。

姫路市内でも調査成果の蓄積によって、良好な資料が増加してきている。



軟質土器 多孔式甑 (19)



軟質土器 平底鉢 (手前から 16・15・27-3)

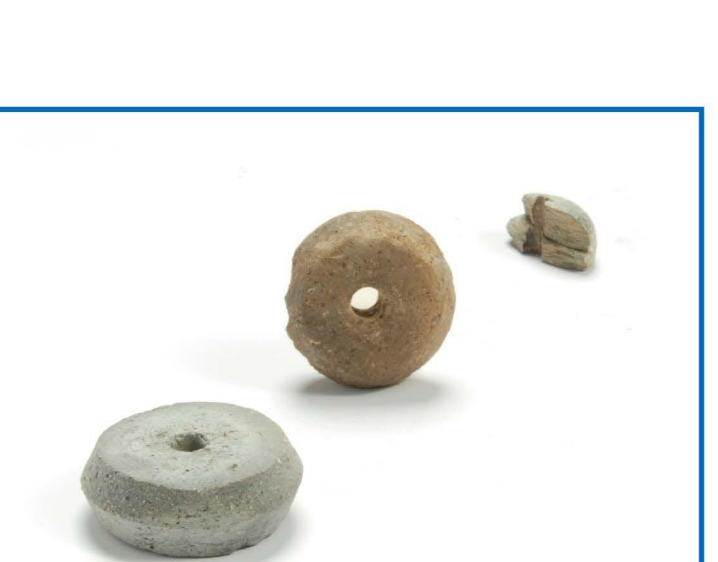


特徴的な調整技法 (15 の部分)

在地の土器群の中から軟質土器を抽出する際の大きな指標の一つに、「叩き技法」が挙げられる。

今回の展示資料では、平格子叩き（叩き板表面につけられた凹部が正方形をなす）が多い（15）。また、内面には調整の痕跡がみられないものもあり、無文の当て具を使用した可能性がある。

なお、後述する花田町加納原田出土の長胴甕（63-3）には、縄蓆文（叩き板に縄を巻きつけたもの）がみられる。市内では初例で、近隣では竹万遺跡（たつの市）で数点が出土しているのみである。



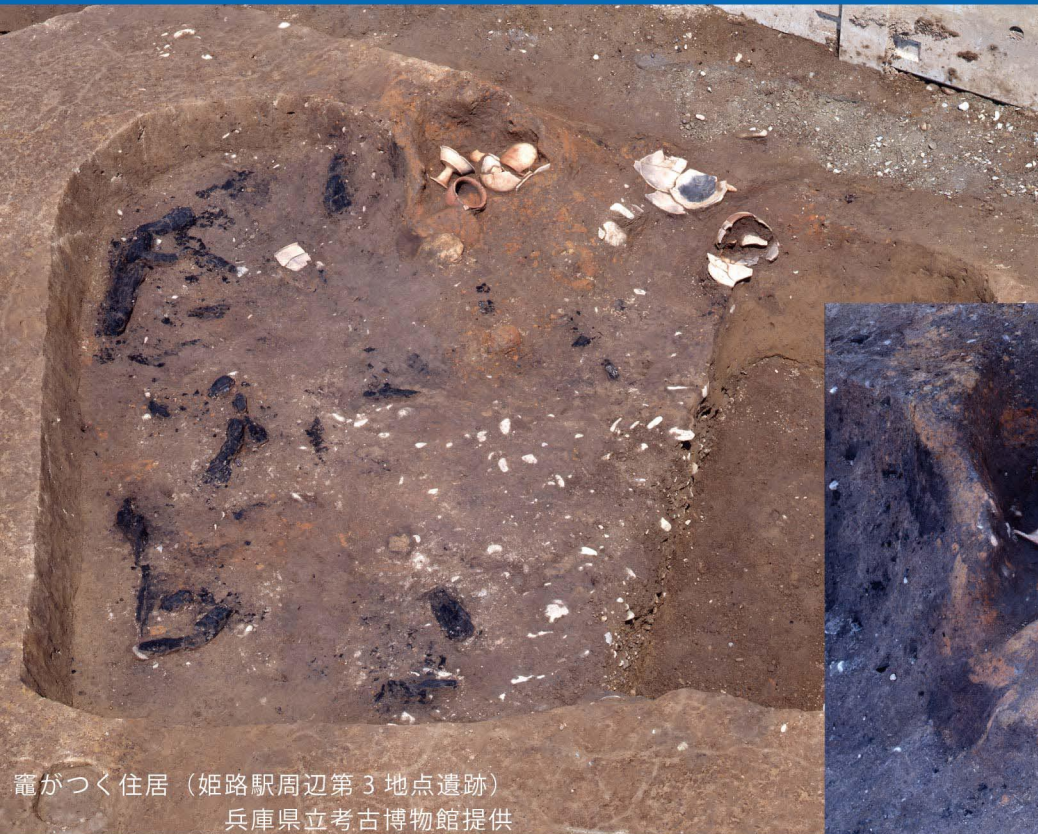
渡来系の紡錘車（手前から 24・25）と
在地の紡錘車 (26)

紡錘車とは、繊維から糸を紡ぐ際に使用する道具である。付属する独楽のようなおもりを回転させることで、糸に撚りをかけるのである。一般的にこの独楽のようなおもりを紡錘車と呼んでいる。

紡錘車自体は、決して新しいものではなく、弥生時代にはみられ、さほど珍しい遺物ではない。なかには、土器の破片を再利用しているものもある。

ところが、古墳時代の中頃になると、算盤玉のような形状をしたものが登場する。この紡錘車は、陶質土器や初期須恵器とともに出土することが多いことから、渡来人がもちこんだ、あるいは倭国で製作したものと考えられている。姫路市内でみると、船場川東区整遺跡例（24）は須恵質で古墳時代中期、三方古墳例（25）は土師質で後期のものである。このことから、前者は渡来人が、後者はその子孫が使用していた可能性が高い。また、三方古墳では滑石製の紡錘車（26）も出土しており、消え行く渡来文化のあり方として興味深い。

竈がつく住居



竈がつく住居（姫路駅周辺第3地点遺跡）
兵庫県立考古博物館提供



竈内土器出土状況
兵庫県立考古博物館提供

渡来人が倭国に持ち込んだものは、先進的な文物だけではない。例えば、生活スタイルともいえる、住まいに^{かまど}竈を造り付けるという風習である。縄文時代以来の倭人の住居の火所は、床を掘り込んだ炉であった。

住居の中央に掘られていた炉とは異なり、竈は壁際に造り付けられていた。これに伴い住居の構造や空間利用に変化が生じたことは容易に想像できよう。

また、竈の導入と同時に、それとセットになる調理器具である多孔式の甗も採用されることになった。故郷から遠く離れた地で、渡来人たちはどのような料理を口にしていたのだろう。



竈つきの住居から出土した土器群（27）

新発見の遺跡

姫路市花田町加納原田字小婦方



位置図（S=1/25,000）

花田町加納原田で、工事に伴う立会調査を行ったところ 63 のような土器が土坑から出土した。

これまで遺跡の空白地であったところであるが、渡来人の痕跡を新たに確認することができた。



出土状況（北から）



初期須恵器 高杯（63-2）

杯部外面には放射状のハケメ状の調整の後に、回転ナデを施す。また、外面下半には、回転方向のカキ目と思われる調整がみられる。内面は回転ナデで仕上げられている。



土坑から出土した土器群（63）



特徴的な調整技法 縄文（63-6の部分）

渡来文化の波

- 伝えられたモノと技術 -

才伎の技



鍛冶・鍛鉄技術



鉄鋌（後3列：28
中列：29
前列：30）

本格的な鉄器生産に必要不可欠な素材として、一般的に考えられてきたのが鉄鋌である。鉄鋌とは、両端の幅が広がる薄い鉄板で、『日本書紀』中の「鉄鋌（ねりがね）」という記述から名付けられたものである。この鉄鋌には、法量に大小の規格があるようで、小型の宮山古墳第3主体例（長約15cm）は福泉洞4号墳（韓国釜山市）に、大型の宮山古墳第2主体例（長約39cm）は福泉洞22号墳にそれぞれ類例が

みられる。

しかし、その故地である朝鮮半島では、棺床に敷き詰める、あるいは、規格が一定で10の倍数単位で副葬される例があることから買地券的な性格や貨幣としての一面もあったとされている。

また最近では、その両端の形状から宮山古墳例に新羅の影響がみられるとの研究もある。



かなはし
鉄鉗

てったく
鉄鐸

たがね
鑿

副葬された鍛冶具（西吉田北1号墳 岡山県津山市）
岡山県立博物館提供

素材とともに、それらを加工する鍛鉄・鍛冶技術も取り入れていたことが、古墳への鍛冶具の副葬や甲冑にみられる鋸留技法からうかがえる。



鉄農工具（手前から曲刃鎌（31）・鑄造鉄斧（33）
U字形刃先（32）

本格的な鉄器として、U字形刃先や曲刃鎌に代表される農工具も伝来した。これらは、単なる道具としてではなく、優れた灌漑技術とともに導入されていたことが、久宝寺北遺跡（大阪府八尾市）などで発見された堰や河川の護岸施設などから明らかになっている。また、『播磨国風土記』の飾磨郡伊和里手苅丘（手柄

山）、同郡巨智里（辻井）には、それぞれ渡来人による開拓・開発の記述がある。

渡来人の持つ、鉄器の加工技術にとどまらず、土木技術をも含めた、より高度な鉄器文化を受容したことで、社会の生産力が飛躍的に向上したことは容易に想像できる。

渡来文化の波

- 伝えられたモノと技術 -

憧憬のまなざし



装身具と威儀具



様々な玉類（宮山古墳第3主体）



新旧の装身具（奥から45・46・51-3）



垂飾付耳飾（左1対：51-2、右1対：41）



金環（左2つ：51-1、残り：43）



釧（40）



釧（40）出土状況（山崎山1号墳）
松本正信氏撮影



金層ガラス玉（打越山古墳）
径約3.9mm
上：拡大（×100）

玉部分のガラスは2層構造になっており、その隙間に金箔を挟み込んでいる。金層ガラス玉の製作地は地中海域で、シルクロードを通り、百済、あるいは伽耶を経由してもたらされたものと考えられている。連珠のものは、朝鮮半島では武寧王陵から、日本では宮山1号墳（滋賀県）でしかみられない類例の少ないものである。



玉杖形金銅製品（44）

長さは約6.5cmを測り、その形状が玉杖（権威を示す儀仗）に似ていることからこの名が付いた。

金銅製の軸の両端に金製のキャップをかぶせており、そのキャップの側面には、小孔が穿たれている。宮山古墳以外には、瓦塚古墳（京都府宇治市）に2例と東京国立博物館の小倉コレクションに1例のみである。

用途は不明であるが、帯金具を装飾していた歩腰であった可能性がある。



銀鍍貼金環頭大刀 柄頭（51-7）
財団法人元興寺文化財研究所撮影

地域社会への参入

招聘から地域経営へ



宮山古墳 第2主体副葬品

宮山古墳第2主体

市川左岸、小富士山から北へ伸びる尾根東側（当センター南側）に位置する。

直径約 30m、高さ約 3m の円墳で、3 基の竪穴式石室を有する。墳丘の上部に第 1・2 主体が、下部に第 3 主体が設けられていた。1969 年と 1971 年に発掘調査が行われ、第 2・3 主体からは豊富な副葬品が出土している。なかでも、垂飾付耳飾や初期須恵器、鉄鋌、初期馬具などのいわゆる渡来系の遺物が多くを占めている。また、竪穴式石室の平面形は、長さの割りに幅が広い短小な形状をしており、床面は円礫敷き、そして側壁の石材の隙間に粘土を充填するという朝鮮半島南部のものと共通する要素を持つ。



有蓋高杯 (17)・蓋 (18) と土師器壺 (19)



上段：石突（左端：51-10）
下段：鉄鋌（左端：51-9）



左上：籠手（51-12）
左中：挂甲小札（51-11）
右上・下：臑当（51-13）



胡籙金具（51-14）

胡籙とは、矢を収納して携行する道具で、右腰に携帯し、矢先を下向きに収納するものを指す。これとは別に、背中に負って、矢先を上向きに収納するものをゆき鞆という。

左右の吊手飾金具とそれに伴う鉸具、横帯飾金具や対になる勾玉形飾金具といった鉄地金銅張のものに加えて、鉄地の鉸具、無窓方形板金具、蛇尾一式も伴出している。



鉄製轡（鑣轡と引手（51-15））
上段：復元模造品



鉄製農工具 前列左：曲刃鎌（31）
前列中：刀子
前列右：ミニチュア袋状鉄斧
後列：袋状鉄斧



鉄製鋌 後列（51-16）
残り（第3主体）

ここで注目すべきは、初期須恵器を含む土器を石室内で出土している点である。当時、国内では土器の副葬はあまりみられず、むしろ朝鮮半島南部に例が多いためである。

これまでみてきたような遺溝・遺物の特徴だけではなく、埋葬原理ともいえるソフトの部分に至るまで彼の地に類似している点から、宮山古墳の被葬者を渡来人とする蓋然性は高いといえる。

丁3次2号墳



丁3次2号墳石室（奥壁側から）
上田哲也氏撮影

姫路市勝原区丁、京見山山塊から西へ開口する谷部に所在する。

玄門部の左右に板状の石材を立てることで袖部を造り、板石一枚で閉塞している点、床面が礫石敷きである点、腰石に類似する用石法を採る点などから、北部九州の横穴式石室との共通点が指摘されている。市内では、丁古墳群で2基、太市中4号墳（太市中）のみで、珍しい石室形態である。また、石室主軸に直交して棺が配置されていたようである。

出土した遺物から6世紀前半に位置づけられる。古墳群でも古層のものが、他と異なる要素を多分に持つということは、丁古墳群の性格を考えるうえで、重要である。



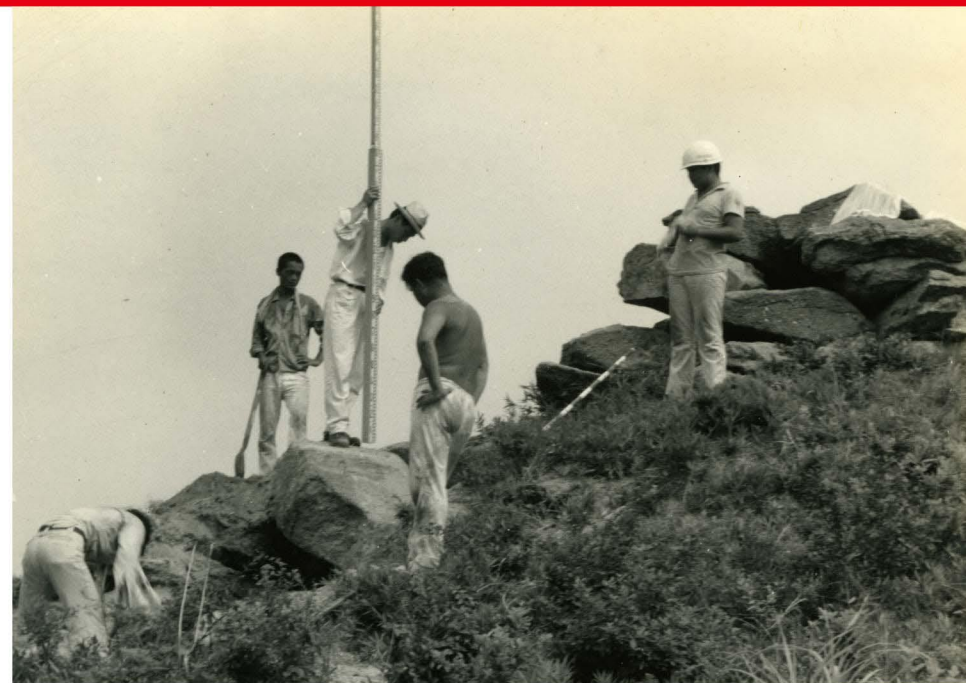
瓶形土器（52-4）

石室側壁付近で出土した。平底で、ほぼ垂直に立ちあがる器形が特徴である。播磨では、舟木中番古墳群（小野市）、袋尻浅谷3号墳（揖保川町）で見られるのみである。平底である点から百済に系譜が追える可能性がある。



石室内出土土器（52）

丁山頂古墳



丁山頂古墳調査風景
ドーム状に立ち上がる天井の様子がよくわかる
上田哲也氏撮影

姫路市勝原区丁と太子町原の境界付近で、京見山から西へ伸びる尾根上に位置する。

本古墳でもっとも特徴的なのは、特異な石室形態にある。それは、正方形に近い形状の玄室の両側壁と前・奥壁は、石材を途中から斜めに架け、ドーム状に天井を構成するという、いわゆる穹窿状天井の横穴式石室である。

このような穹窿状天井を有する横穴式石室墳は、市内では、丁3次1号墳と飾東1号墳（飾東町）のみで、非常に少なく、山田大山3号墳（太子町）、西宮山古墳、馬立1号墳（たつの市）など、むしろ揖保郡に集中している。そして、丁山頂古墳が所在する一帯は、揖保郡大田里にあたり、『播磨国風土記』によると、呉勝という渡来人の記述がみえる。これ以外にも、揖保郡には渡来人に関する記事が多い。また、穹窿状天井の横穴式石室は、百済の宋山古墳群の影響がみられるとの見解もあり、

付近一帯に渡来人の集団が存在した可能性が高い。



石室内出土土器（53）

その後の渡来文化

- 律令国家へ -

異形の土器



姫路市内出土の異形の土器群

異形の土器



装飾付壺（ドンデン2号墳）

古墳時代後半になると、数多くある須恵器の中で、目を惹くものが出現する。それは、一般的な器種、特に壺の肩部に人物や動物などの小像や器のミニチュアである小器を取り付けることで、加飾した一群である。

市内では、まず、見野長塚古墳（四郷町）や手柄山北丘古墳（延末）^{のぶすえ}で採用された。見野長塚古墳は、全長約 34m の前方後円墳で、手柄北丘古墳もその可能性があるようである。近隣の同規模の古墳でも装飾付須恵器は出土

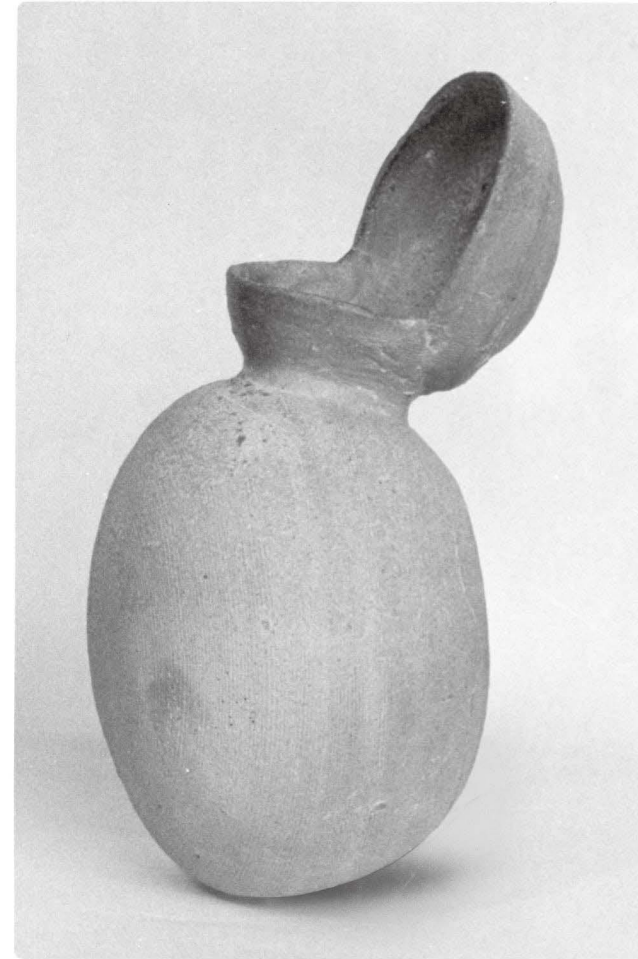
しており、後期前方後円墳の葬送儀礼における祭祀具の一つであったことがうかがえる。

また、ドンデン2号墳（林田町）や西脇79号墳（西脇）などでも出土しており、古墳時代の終末にかけて、装飾付須恵器を用いた祭祀が継続して行われていたことがわかる。

横穴式石室の採用後に導入された装飾付須恵器であるがその初現については明らかではない。ただ、類似する土器は、朝鮮半島でも散見できるが、その背後にある思想的な脈絡までもが共通するのかどうかは不明といわざるを得ない。



装飾付壺（55）



杯付提瓶（姫路市勝原区朝日谷）
姫路市市史編集室提供

法量などの詳細は不明である。須恵器の提瓶^{ていへい}に同じく須恵器の杯^{かみ}が取り付いた形態をしている。姫路市内では類例がなく、播磨では上三草・北山7号墳（加東市社町^{やしろ}）で出土しているのみである。これを参考にすると器高は 15 cm と推定できる。

朝鮮半島では、類例が多くみられるようであるが、出土位置などが把握できているものは少ないのが現状である。



皮袋形瓶（54）

底部の幅は約 25cm、残存高は約 20cm を測る。須恵質焼成である。上半が失われているが、全体のわかる資料を参考にすると、ほぼ直立する口縁部が付いて、瓶となるようである。表面に竹管状の工具による刺突^{しとつ}がみられ、皮袋を表現しているとみられる。また、別の面には、突帯^{とつたい}や刺突文が施されておらず、表裏の区別があったことがうかがえる。

この土器の特徴は、もちろん、その器形にあるが、その製作技法も独特である。内面を観察すると、少し外側にたわんだ粘土板を接合しているようにみえるが、型を合わせたようぴたりとなっており、接合時の調整痕が一切残っていない。

その後の渡来文化

- 律令国家へ -

古代寺院



辻井廃寺と下太田廃寺の創建瓦

辻井廃寺・下太田廃寺



辻井廃寺の創建瓦（58・59）



下太田廃寺の創建瓦（60～62）

これまでみてきたような渡来系文物は、6世紀になるとさほど目立たなくなる。では、その後、渡来人たちは、どうなっていったのであろうか。

この問題を考えるうえで、山崎山古墳群と辻井廃寺、丁古墳群と下太田廃寺の関係が興味深い。

前者は、飾磨郡巨智里にあたり、『播磨国風土記』には、山村巨智という渡来系の人物の名がみえ、またこの付近一帯を開拓したという記述がある。山崎山古墳群では、先にみたく鉋や装飾ガラス玉など渡来系の遺物が出土している。後者は、揖保郡大田里に比定される。同じく『風土記』によると、呉勝が韓国より渡来してきて、最初は紀伊国にたどり着いた。その後、分かれて摂津国に移住し、最終的に播磨国揖保郡に至ったとある。ちなみに大田里とは、最初の居住地である紀伊国名草郡大田という地名にちなんでいる。また、丁古墳群では、百済系の瓶形土器が副葬されたり、穹窿状天井の横穴式石室を持つ古墳が築造されたりと、考古資料からも渡来人との関わりが想定できる。

そして、これらの地に所在する辻井廃寺や下太田廃寺は、創建瓦の様相から古代寺院の中でも早い段階に造営されたことがわかっている。つまり、6世紀前半からそれぞれの地に新たに定着した渡来人の子孫が、飛鳥時代になり、いち早く寺院建立にかかわったとみることができよう。同様の状況は、各地で確認されており、律令国家成立時に各地で活躍していた姿が想像できる。

平安時代初期（815年）に編纂された『新撰姓氏録』（畿内の古代氏族名鑑）によると、渡来系の先祖を持つ氏族は、全体の約3割にのぼる。考古資料では足跡を追うことはできなくとも、彼らの果たした役割の大きさがうかがいしれる。

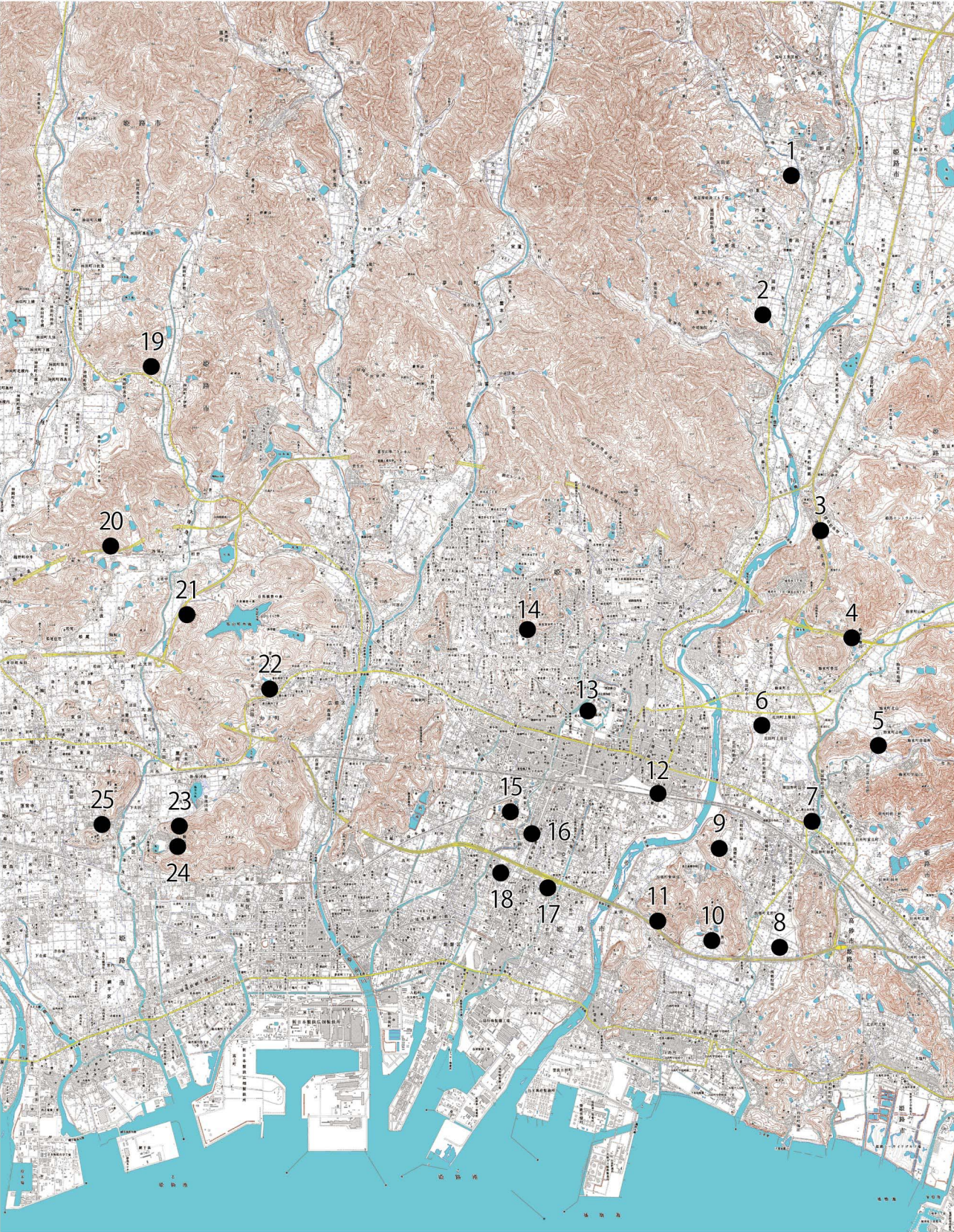


辻井廃寺と山崎山古墳の位置関係（S=1/25,000）



下太田廃寺と丁古墳群の位置関係（S=1/25,000）

市内の渡来系文物出土遺跡位置図



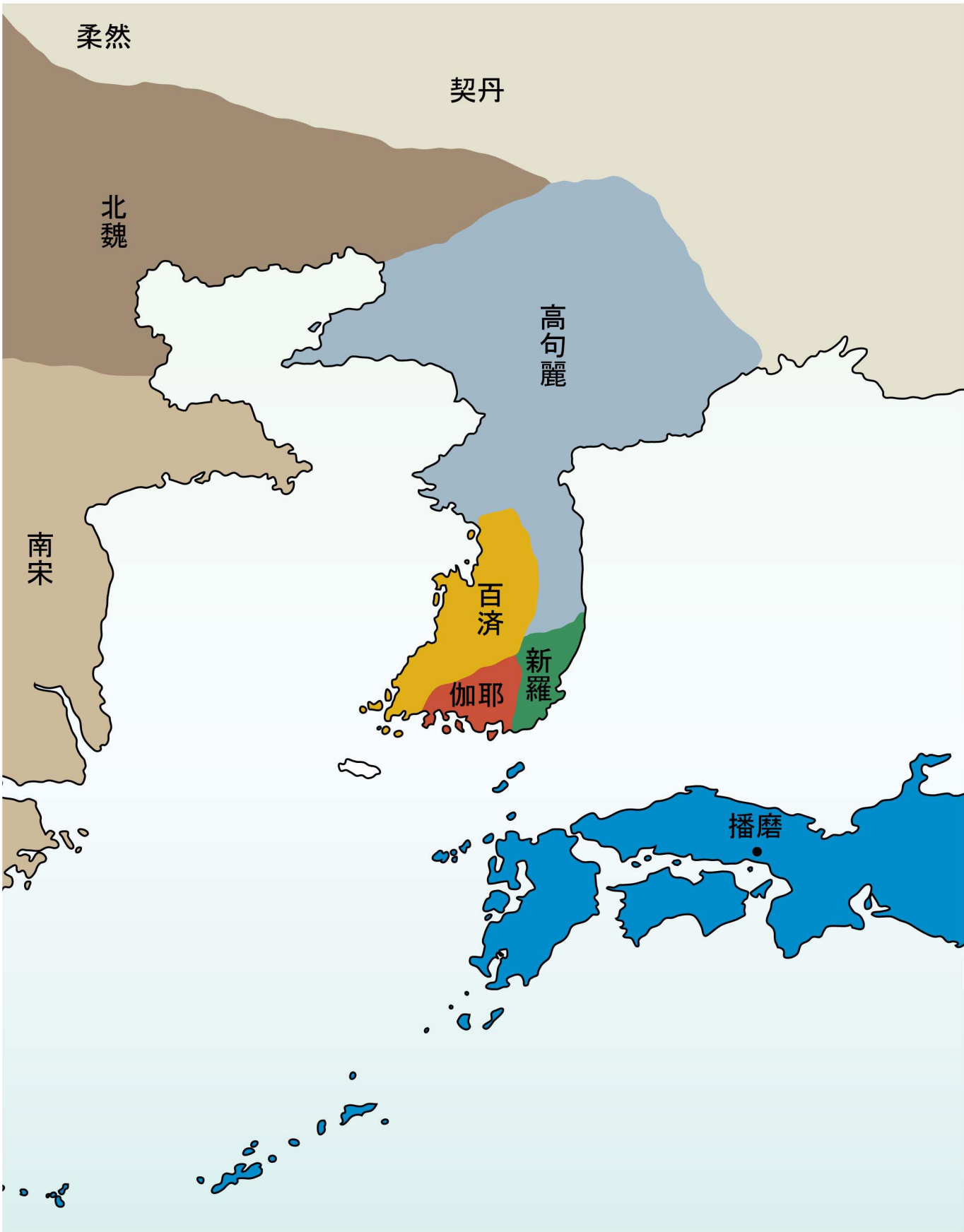
1. 片山西古墳
2. 法花堂 2 号墳
3. 三方古墳
4. 飾東 1 号墳
5. 小丸山古墳・小丸山 2 号墳
6. 加納原田
7. 国分寺台地遺跡
8. 見野長塚古墳
9. 宮山古墳
10. 奥山大塚古墳
11. 打越山古墳
12. 姫路駅周辺第 3 地点遺跡
13. 特別史跡姫路城跡(西の丸)
14. 山崎山 1・2 号墳
15. 手柄山北丘古墳
16. 小山遺跡
17. 不明
18. 船場川東区整遺跡第 6 地点
19. ドンデン 2 号墳
20. 西脇 79 号墳
21. 太市中 2・4・6・9 号墳
22. 青山 1 号墳
23. 丁山頂古墳
24. 丁 3 次 1・2 号墳 丁古墳群
25. 不明

市内の渡来系文物出土遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	対象文物 ※1	主要文献 ※2
1	片山西古墳	香寺町土師	54	松本・加藤 1986 / 鎌谷 1996
2	法花堂 2 号墳	香寺町田野	29 34 35	松本・加藤 1986
3	三方古墳	豊富町御蔭	25	岸本 1980
4	飾東 1 号墳	飾東町豊国	穹窿状天井の横穴式石室	葛野 1963 / 山上 1996
5	小丸山古墳 小丸山 2 号墳	飾東町志吹	鑄造鉄斧 57	東 1998 / 岩井 2008
6	未命名	花田町加納原田	63	
7	国分寺台地遺跡	御国野町国分寺	12	松本 1958
8	見野長塚古墳	四郷町見野	43	秋枝 1999
9	宮山古墳	四郷町坂元	竪穴式石室 5～9 28 30～32 36～39 41 42 44 47～51	松本・加藤 1970・1972
10	奥山大塚古墳	奥山	金環	梅原・武藤 1935
11	打越山古墳	北原	金層ガラス玉 2 連珠	島田 1938 / 浅田 1976
12	姫路駅周辺第 3 地点遺跡	市之郷	16 18 27	秋枝 1999 / 福井 2003 / 山田 2005
13	特別史跡姫路城跡(西の丸)	本町 68 番地	装飾付須恵器	秋枝 1991
14	山崎山 1 号墳 山崎山 2 号墳	辻井	40 45 46	松本・加藤 1974
15	手柄山北丘古墳	西延末	55	松本 1959 / 井守 2005
16	小山遺跡	延末	17 軟質土器	今里 1969・1969
17	不明	亀山?	把手付鉢	増田 1959
18	船場川東区整遺跡第 6 地点	飯田	10 11 13～15 19～21 23 24	大谷・小柴 1998 / 福井 2003
19	ドンデン 2 号墳	林田町	装飾付須恵器	井守 2005
20	西脇 79 号墳	西脇	装飾付須恵器	高瀬 1995
21	太市中 2 号墳 太市中 4 号墳 太市中 6 号墳 太市中 9 号墳	太市中	装飾付須恵器 穹窿状天井の横穴式石室 装飾付須恵器 装飾付須恵器	柏原 2003
22	青山 1 号墳	青山	把手、須恵器多孔式甗	加藤 1963
23	丁山頂古墳	勝原区丁	穹窿状天井の横穴式石室	上田 1985 / 太子町史編集委員会 1989
24	丁 3 次 1 号墳 丁 3 次 2 号墳 丁古墳群	勝原区丁	玄室平面方形の横穴式石室・ 土師器角形把手付杯 52-4 装飾付須恵器	上田 1966 / 井守 2005
25	不明	勝原区朝日谷	杯付提瓶	姫路市市史編集委員会 1970

※1 対象文物の番号は展示品目録の番号と一致する。
※2 主要文献名は 38 頁を参照。

5～6世紀中頃の東アジア



主要参考文献

秋枝 芳 1991『姫路城昭和の大修理の成果と展望（1）―考古資料の再検討―』『城郭研究室年報』V o l . 1 姫路市立城郭研究室
秋枝 芳 1999『姫路駅周辺遺跡（第2次調査）』多田暢久編『TSUBOHORI 平成6年度（1994）』姫路市教育委員会
秋本吉郎（校注） 1993『風土記』岩波書店
浅田芳郎 1976『打越山古墳』『播磨国分寺周辺の古墳』姫路市教育委員会
東 潮 1999『古代東アジアの鉄と倭』淡水社
今里幾次 1974『山陽道播磨国の瓦葺駅家』兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県の歴史』12 兵庫県
今津啓子 1987『大阪湾沿岸地域の朝鮮系軟質土器』『東アジアの考古と歴史 下 岡崎敬先生退官記念論文集』岡崎敬先生退官記念事業会
今津啓子 1994『渡来人の土器 - 朝鮮系軟質土器を中心として - 』『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流 5 名著出版
井守徳男 2005『兵庫県出土の装飾杯須恵器集成（3） - 西播磨地域・補遺 - 』『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第4号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
岩井顕彦 2008『竹万遺跡出土鋳造鉄斧の歴史的意義』岸本道昭編『竹万遺跡 - 県営ほ場整備事業（掛西地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』

たつの市文化財調査報告1 たつの市教育委員会

上田哲也編 1966『姫路丁古墳群』 東洋大学付属姫路高等学校考古学教室
上田哲也 1985『播磨地方における横穴式石室の採用と展開』『未永先生米寿記念献呈論文集<乾>』
梅原末治・武藤 誠 1935『奥山古墳』『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十一輯 兵庫県
大阪府近つ飛鳥博物館編 2003『平成15年度春季特別展 黄泉のアクセサリ - 古墳時代の装身具 - 』大阪府近つ飛鳥博物館図録30
大谷晃二編 1996『96 特別展 黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立つ風土記の丘
大谷輝彦・小柴治子 1998「（仮称）船場川東土地区画整理事業地内遺跡第6地点11区12区（第13次調査）」多田暢久編『TSUBOHORI 平成8年度（1996）』姫路市教育委員会
加古川市教育委員会編 1997『行者塚古墳 発掘調査概報』加古川市文化財調査報告書15
柏原正民編 2003『太市中古墳群 - 太子竜野バイパス関係 発掘調査報告書 - 』兵庫県文化財調査報告書 第258冊 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
加藤史郎 1963『青山群集墳』『姫路古代誌』No8 姫路古代文化研究会
鎌谷藤千代 1996『兵庫県指定史蹟 片山古墳の今昔』私家版
亀田修一 2003『渡来人の考古学』『七隈史学』第4号 七隈史学会
川西宏幸 2004『同型鏡とワカタケル - 古墳時代国家論の再構築 - 』同成社
岸本一宏 1986『玄室方形プランの横穴式石室について』『多利向山古墳群 - 近畿自動車道鶴鶴線に伴う埋蔵文化財調査報告書（IV）』兵庫県文化財調査報告書 第35冊 兵庫県教育委員会
岸本一宏 1994『『播磨国風土記』と渡来文化』榎本誠一編『風土記の考古学2』播磨国風土記の巻 同成社
岸本道昭 1980『三方古墳調査報告』『播但連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書 II』兵庫県教育委員会
岸本道昭 2006『山陽道駅家跡 日本の遺跡11』同成社
喜谷美宣 1985『加古川市カンス塚古墳発掘調査概要』加古川市教育委員会
木下 亘 1984『古墳出土の初期須恵器をめぐって - 畿内及びその周辺地域の資料を中心として - 』『原始古代社会研究』6 校倉書房
京都大学総合博物館編 1997『京都大学総合博物館春季企画展展示図録 王者の武装 - 5世紀の金工技術 - 』
『百済武寧王と倭の王たち』実行委員会編 2004『百済武寧王と倭の王たち 秘められた黄金の世紀展』
葛野 豊 1963『兵庫県飾東1号墳』『古代学研究』34号 古代學研究会
熊谷公男編 2001『大王から天皇へ』日本の歴史 第03巻 講談社
近藤 広編 2003『企画展 古墳時代の装飾品 - 玉の美 - 』栗東歴史民俗博物館
佐伯有清 1981『新撰姓氏録の研究 研究編』吉川弘文館
佐伯有清編 1995『古代を考える 雄略大王とその時代』吉川弘文館
酒井清治 1998『日韓の儀の系譜から見た渡来人』『橿崎彰一先生古希記念論文集』橿崎彰一先生古希記念論文集刊行会
坂本美夫 1985『馬具』考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社
定森秀夫 1995『陶質土器・初期須恵器からみた瀬戸内と朝鮮』松原弘宣編『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王権と交流 6 名著出版
佐藤寛介編 2005『古備の渡来文化 - 渡り来た人々と文化 - 平成17年度 岡山県立博物館特別展 文化庁芸術拠点形成事業』岡山県立博物館
滋賀県立安土城考古博物館編 2001『平成13年度春季特別展 韓国（からくに）より渡り来て - 古代国家の形成と渡来人 - 』
島田 清 1938『播磨師磨郡系引周辺の史蹟』
太子町史編集委員会編 1989『太子町史 第三巻』太子町
高松雅文・櫛真麻 2007『地域別概説 播磨の横穴式石室』『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
武田幸男編 2005『古代を考える 日本と朝鮮』吉川弘文館
田中央生 2005『倭国と渡来人 交錯する「内」と「外」』歴史文化ライブラリー 199 吉川弘文館
千賀 久編 2003『古墳時代の馬との出会い - 馬と馬具の考古学 - 』橿原考古学研究所特別展図録 第59冊 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館
千賀 久・竹田正則・露口真広編 2006『海を越えたはるかな交流』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 特別展図録 第66冊 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館
辻 秀人編 2008『百済と倭国』高志書院
富山直人 2003『播磨における大陸からの移住者』『日本考古学協会 2003年度 滋賀大会研究発表資料』日本考古学協会・2003年度滋賀大会実行委員会
富山直人 2003『播磨における大陸からの移住者』『日本考古学協会2003年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会
永井信弘 1999『地方窯成立の側面 - 食膳奉仕と須恵器生産 - 』『ひょうご考古』第5号 兵庫考古研究会
野上丈助 1983『日本出土の垂飾付耳飾について』古代を考える会編『藤沢一夫先生古希記念 古文化論叢』藤沢一夫先生古希記念論集刊行会
朴 天秀 1995『渡来系文物からみた伽耶と倭における政治的動向』『待兼山論叢』第29号 大阪大学文学会
朴 天秀 2007『伽耶と倭 韓半島と日本列島の考古学』講談社メチエ 398 講談社
菱田哲郎 1997『播磨の古墳と寺院』『季刊考古学』第60号 雄山閣
菱田哲郎 2007『渡来系文物からみた渡来人の動向 - 播磨を中心に - 』和田晴吾編『渡来系遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』
姫路市史編集委員会編 1970『姫路市史』第2巻 姫路市役所
平野邦雄 2007『帰化人と古代国家』歴史文化セレクション 吉川弘文館
廣瀬雄一編 1999『平成11年度特別企画展 倭国と伽耶 - 古代の海をこえて - 』佐賀県名護屋城博物館
福井 優 2004『中播磨の渡来系文物』『渡来系文物からみた古墳時代の播磨』第5回 播磨考古学研究集会 資料集 2004 播磨考古学研究集会実行委員会
町田 章編 1997『古墳時代の装身具』日本の美術 第371号 至文堂
前田敬彦編 2001『渡来文化の波 - 5～6世紀の紀伊国を探る - 平成13年度秋季特別展』和歌山市立博物館
増田重信 1959『姫路南郊出土の須恵器』『HIMEJI古代誌』NO5 姫路古代文化研究会
松本正信 1958『国分寺台地遺跡について』『HIMEJI古代誌』NO2 姫路古代文化研究会
松本正信・加藤史郎 1970『宮山古墳発掘調査概報』姫路市文化財調査報告Ⅰ 姫路市文化財保護協会
松本正信・加藤史郎 1973『宮山古墳第2次発掘調査概報』姫路市文化財調査報告Ⅳ 姫路市教育委員会
松本正信・加藤史郎 1974『土に埋もれた文化財 姫路の先土器時代～古墳時代』私家版
松本正信・加藤史郎 1986『法花堂2号墳』香寺町教育委員会
松本正信・加藤史郎・中村信義・中浜久喜 2000『山津屋・黍田・原 町道山津屋・原線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』揖保川町文化財報告書Ⅷ 揖保川町教育委員会
村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
安永周平 2002『朝鮮半島における象嵌琉璃玉・金屑琉璃玉』『朝鮮古代研究』第3号 朝鮮古代研究刊行会
安永周平 2003『ガラスに見る大陸文化』『企画展 古墳時代の装飾品 - 玉の美 - 』栗東歴史民俗博物館
山上雅弘編 1996『飾東2号墳 - 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第XX冊 - 』兵庫県文化財調査報告 第152冊 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
山崎信二 1983『後期古墳と飛鳥白鳳寺院』『文化財論叢』同朋舎出版
山田清朝編 2005『姫路市市之郷遺跡 - J R山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ - 』兵庫県文化財調査報告書 第286冊 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
行田裕美・平岡正宏・坂元心平 1997『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第58集 津山市教育委員会
『古代寺院からみた播磨』2003 播磨考古学研究集会
『渡来系文物からみた古墳時代の播磨』第5回 播磨考古学研究集会 資料集 2004 播磨考古学研究集会実行委員会
『渡来系文物からみた古墳時代の播磨』第6回 播磨考古学研究集会 記録集 2005 播磨考古学研究集会実行委員会